

IV 動乱の幕末

(1) 維新への動き

嘉永6年(1853)のペリー来航を機に、攘夷・開国のはざままで幕藩体制は大きく揺らぎ始めます。そして、安政5年(1858)に大老井伊直弼が朝廷の許可を得ないまま日米修好通商条約を締結したことで、朝廷と幕府の対立が高まります。井伊は朝廷に味方した徳川慶喜の支配勢力を排除し、尊王攘夷派への弾圧(安政の大獄)を断行します。このとき、井伊の強権策に反対した久世広周は罷免されてしまいます。しかし、万延元年(1860)に井伊が水戸・薩摩の浪士によって暗殺されると、幕府の権威は失墜していきます。

そこで、幕府は権威回復を図るために老中の安藤信正と久世広周を中心とした新体制を組み、公武合体運動を推し進めました。安藤・久世は、14代将軍家茂と孝明天皇の妹和宮との婚姻(和宮降嫁)を成立させ、公武合体による幕府権威の強化を図ろうとします。しかし、安藤が水戸浪士らに襲われ負傷するという事件(坂下門外の変)が起こり、幕府の権威は益々失墜してしまいました。

一方、朝廷が幕府に攘夷実行を迫りながら政治への発言力を増す中で、幕府の権力が衰えると、政権を朝廷に返上すべきとの声が大きくなり、尊王攘夷は次第に雄藩による倒幕運動へと変化していきました。

そして、倒幕派の勢力が強まる中、慶応3年(1867)に15代将軍慶喜は大政奉還を行い、武力による倒幕の大義名分をなくします。ところが、武力倒幕派は王政復古の大号令を宣言して、天皇を頂点とした新しい政府を樹立しました。この結果、徳川幕府は消滅しますが、旧幕府軍と新政府軍との激しい戦闘となり、鳥羽・伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争が勃発。その後、江戸城は新政府に開城され、新しい時代を迎えることとなりました。

幕末維新略年表

年号	嘉永四 六	安政元 四 五	万延元	文久二	元治元 三	慶応二 三 四	明治元 三 四 五
西暦	一八五二 一八五三	一八五四 一八五五 一八五六 一八五七	一八六〇	一八六二	一八六三 一八六四	一八六六 一八六七 一八六八	一八六八 一八七〇 一八七一 一八七二
日本の動き	藩主久世広周が幕府老中に就任 ペリー浦賀に来航	日米和親条約締結 日米修好通商条約締結 井伊直弼が大老に就任	安政の大獄始まる 桜田門外の変 久世広周、幕府老中に復帰 久世広周、井伊を批判し老中辞す	坂下門外の変 公武合体政策の推進 久世広周、老中失脚・蟄居処分 農兵隊の組織	八月十八日の変 天狗党騒動 久世広文が藩主に就任	薩長同盟 大政奉還 王政復古の大号令 旧幕臣彰義隊を結成 江戸開城	脱藩者が藩主広文を隠匿 家老木村正右衛門ら脱藩 岩井戦争が勃発 藩内佐幕派の脱藩始まる
関宿藩の動き							関宿藩「万字隊」が彰義隊に加わる 脱藩者が藩主広文を隠匿 藩主広文が帰城 久世広業が藩主に就任 関宿城廃止決定 関宿関所の廃止

(2) 関宿藩の終焉

激動の幕末期に関宿藩はどのような運命をたどったのでしょうか。

坂下門外の変後に再び老中を罷免された久世広周は、家督を幼少の広文に譲りましたが、引き続き実質的な藩主として藩政を掌握し、藩の方針を尊王攘夷に定めて、再度幕政への復帰を目指します。また、藩政では農兵論を提唱していた船橋随庵を中老に据えて、農兵隊を創設しました。しかし、広周は元治元年（1864）に志半ばにして亡くなりました。

久世広周の没後、後継の広文には幼少病弱のため求心力がなかったことから、藩の統制を欠き、藩内は勤王派と佐幕派に分裂しました。

藩内の勤王派は王政復古の号令に応え、家老亀井満次が藩主の名代として上京し、翌慶応4年（1868）に勤王の誓約を果たします。また、関宿周辺には佐幕派が集まり暴徒化していたため、元家老杉山対軒は佐幕派鎮圧のため官軍の支援を取り付け利根川筋に出兵します。

一方、木村正右衛門や丹羽十郎右衛門らを中心とする藩内の佐幕派130名は、岩井戦争の後、関宿を脱走し江戸藩邸で待つ100名と合流して、広文を隠匿しました。その後、杉山対軒は、江戸深川の藩邸へ藩主奪還を試みますが、失敗してしまいます。上野戦争が始まると、佐幕派の一部約60名は、奥原秀之助を隊長とする「卍隊」を組織して、上野の彰義隊に合流、激戦の後、官軍に追われた一部は藩主を連れて佐倉に敗走します。しかし、亀井を中心とした勤王派がついに佐倉で藩主を奪還し、藩主は再び関宿に戻りました。

これら藩の分裂から藩主奪還の一連のお家騒動は「久世騒動（久世紛争）」と呼ばれています。この騒動は藩取り潰しにもなりかねない事件であったため、亀井ら勤王派は新政府に対して本領安堵と藩主への寛大な処分を再三嘆願しました。その結果、領地5千石の没収と藩主の隠居という軽い処分済み、広文の弟の広業が新藩主に就任して藩は存続しました。なお、対軒は明治2年に東京から関宿への帰路、暗殺されてしまいます。

その後の関宿藩は、廃藩置県で解体となり、藩士の多くは東京へ移住していきます。

また、関宿城は一部民間に払い下げられ、天守は取り壊されることとなります。



○杉山対軒肖像



○亀井満次肖像